

が営まれており、林業従事者は一時半減したものの、その後は増加し2015年には2005年の3倍以上となり徐々に担い手が復活している。

次に高遠区域について概観する。高遠区域は高遠藩の城下町として栄えた地域である。高遠区域は、1875年に町制のもと西高遠町と東高遠町が成立し、1889年4月1日に両町が合併し高遠町となった。その後、1956年9月30日に長藤村と三義村とを合併した。1958年4月1日には藤沢村、そして1964年4月1日には河南村が合併した。2006年には、既述の通り伊那市の一部となり、現在は高遠区域となっている。高遠区域の面積は139.36km²で、2017年10月1日現在の人口は5,751人である。本研究で取り上げる勝間という集落は、高遠区域における河南地区に位置する。2017年10月1日現在の河南地区の人口は1,941人、そのうち勝間の人口は357人である。

このなかで本研究では、長谷区域の8集落のうち人口の少ない3集落を除いた、非持、溝口、市野瀬、非持山、黒河内の5集落、長谷区域に隣接している高遠区域の勝間集落を研究対象として設定する。

Ⅱ 長谷・高遠区域における葬儀

長谷・高遠区域では、伝統的に土葬が行われてきたが、1956年の伊那里村での火葬場の設置に伴い1960年代頃から火葬へと転換が起こった。自宅で行われていた葬式も1990年代頃から公民館や寺院を利用するようになった。また、同時期に葬祭業者の参入もあり、2004年に高遠町に葬祭ホールが建設されたことで葬儀の場は葬祭ホールに移行した。本章では、長谷・高遠区域における時代ごとの葬儀の方法について長谷村史や既往研究、聞き取り調査に基づいて述べる。

Ⅱ-1 土葬時代の葬儀

本節では、長谷・高遠区域における土葬時代の葬儀の方法について述べる。

土葬の時代において、人がなくなると、関係の

深い近親者がその体を拭き清めたあと、衣服を着替えさせ体の形を整える。この時魂は襟から出入りするという信仰から、着物は襟をとって左前に着せ、襟で帯をしめる。また、親類縁者に早急に連絡を行う必要があったため、各方面への担当者を決め、真夜中であろうと出立した。二人ずつ組になっていくが、必ず提灯を持っていった。連絡を行う先は親戚知人であるが、そのほかにも見舞いに来た相手には必ず知らせた。その内容は、死亡の時刻から埋葬場所まで詳細なものであった。受ける方は丁寧に受け、遠方からの告げの場合は、一飯を振る舞うのが礼とされていた。

一方、その家に対して最も関係の近い人（本家・親様・分家など）や隣家の年配者が先に立って、葬儀の段取りをした。近所の女性たちは食材の買い出し、料理の準備やお茶の接待に当たる。葬送の手順について、まず暦を見てその六曜により日をみて、友引の日は、友を引くといって古来より葬式を避ける。兄弟や子供達が遠いところに居て、来るのに時間がかかる場合は、予め日を定めるので中一日あるいは二日置いた。そして、日取りの決定については、その時節も考慮に入れなければならなかった。殊に正月三ヶ日は葬式を出さない。また家業上、農家においては田植えの最中や、養蚕の最盛期には仮埋葬にすることが多かった。一旦日時が決まると、過去の香奠帳によって、その家族の付き合いや親類関係また死者のその家族に当たる位置（当主・主婦・年寄り・子ども）から見舞人の予想を立て、さらに葬式の規模、各人の分担役割によって葬送の手伝いの範囲や買物などを相談して決定していく。

人の死後における葬儀の仕方や習慣は地域や村落、宗派などによって様々である。長谷区域での葬儀の手順について以下に述べる。

誰が葬儀の役割の中心を担うのかは地域によって差異が存在する。葬儀のいろいろな仕事や役割は隣組の組員によって担う場合が多かった。葬儀用具の準備から出棺後の片付けまで隣組は重要な役割を果たしていた。葬儀の役割で特に重視されたもの、帳場と呼ばれる役割で、これは料理の出

来や盛り付けの出来を判断する役割であった。

葬儀の当日は早朝から隣組の人達が来て料理や支度を手伝った。土葬の穴掘りは激務であるが重要な仕事であるため、隣組ごとの穴掘帳によって決められた順番通りに、3人ずつで穴掘りすることになっていた。午前中から掘り始めるが、穴掘り中は重箱での弁当と酒が振る舞われ、葬儀当日も上座に座ることになるなど穴掘り役は丁重に扱われた。地区によって、親戚の者に掘らせるところもあった。

葬儀は家格、戒名、徴用、財政などによって一様ではないが、普通一仏と称した大和尚と2人の伴僧、計3人によって執りおこなわれた。特に豪勢な葬儀が執り行われる場合には三仏、つまり3名の大和尚と6名の伴僧が呼ばれることもあった。

葬儀は家で読経と焼香が行なわれたあと、寺か広場へ行った。送列は到着した寺や広場で三回半周り、導師の正面に棺を安置して引導が渡され、経があげられ、引導が渡された。その後、近親者の焼香がおこなわれて式が終わり、再び葬列を組んで墓所に到った（長谷村誌刊行委員会、1994）。埋葬にあたっては、棺の四隅に縄をつけ、墓穴に死者が北面するように吊った。喪主は棺の結び目を切って蓋の上に石をおき、近しい血縁者から順に土をかぶせた。その後、盛土を作り、その上に穴掘りで使った木の棒を3本束ねて立て、中心から縄で石を吊った。

葬式が終わると、僧侶をもてなす。また、死者の着物や葬送に使ったものなどを洗い、近所から持ち寄ったもの、あるいは村落から借りた共用のものなどを返却した。葬送の片付も終わり一段落したあと、手伝い全員にお礼のあいさつをした。その後翌日か当日に、菩提寺に寺参りを行った。

Ⅱ-2 火葬導入後の葬儀

長谷区域には1956年に長谷村の火葬場が市野瀬集落の南部に設置された。この長谷村火葬場は伊那市にも先駆けて設置されている。

この火葬場の設置の理由に関して、資料的根拠は得られていないが、住民への聞き取りでは、

1955年から1957年に建設された美和ダムの工事で事故死した作業員を火葬するためであるといった理由や、山で遭難した者の遺体を燃やすためであるといった理由が挙げられており、住民の遺体を火葬するためではなかったという認識があった。そのためか、葬送の火葬への転換は1960年を前後して始まる。大谷大学民俗学研究会編（1971）によると、1970年の段階で他の集落は土葬であるが市野瀬ではほとんど火葬を行っている」と記載されていることから、近接地であった市野瀬から火葬が広がっていったと推測できる。市野瀬では火葬場の煙の臭いがすることもあったというが、火葬場が設置されたことへの当時の不満は聞き取りの中で語られることはなかったため、おおむね受け入れられていたようである。

火葬場の運営は村の職員が行っており、火葬場に遺体を運ぶ際も村が所有する自動車を使っていたという。

火葬は葬儀に先立って行われるため、葬儀の手順は特に変化しなかった。関沢（2015）で述べられている遺骨葬の形式であり、葬儀から埋葬まで土葬時の葬儀手順と変わらず行われた。

Ⅱ-3 平成以降の葬儀体制の変化

地域共同体によって担われる葬儀は各家への負担も大きく、人的にも時間的にも多くの資源が必要とされた。しかし、高度経済成長期を経て、地域共同体の解体や、親族との関係性の弱まり、経済情勢の変化などにより、従来のような大規模な葬儀は負担が大きくなってきた。こうした中で、長谷・高遠区域では公民館や寺を利用した葬儀が1990年代から一斉に行われるようになった。公民館や寺といった大きな敷地を利用することで喪家に対する負担も減少し、また葬儀に利用する食器や座布団といった用具も集落で一揃え管理することで無駄を減らすことができた。

公民館や寺で葬儀を行うようになり、料理をどこで行うかといった問題が浮上した。この葬儀時の仕出し料理の提供の需要をくみ取ったのがJAの葬祭部門であった。